

(巻頭言)

新しい時代の更埴教育会のこれから

更埴教育会長 堀口 潔

新しい時代、令和が始まりました。今から遡ること50年前の昭和45年4月に更埴教育会は、長野市南部分離独立し、小さな教育会として発足しました。時の近藤頼道会長は、新生更埴教育会総会の挨拶の中で、これまでの900名を超えた会員が400名そこそこの半数以下に減少したことに触れながら、

およそ、教育会や学校というものの価値は、その規模の大きさによるものではなく、会員自身の構えによるものだと思う。更埴教育会という共通の目的をもった同じ地域のまとまりが一つの形を形成し、生命を持っている。会員の一人一人が、常に教育の本質を自覚追求し、相互に交流し合うとき、この生命体はより強固なものとなり、千曲川の清流の如く、いつまでもよどむことなく流れに続くものと思う。(会報30号)

と、述べています。また、分離独立から15年たった昭和60年当時、坂城小学校長であった塚口一男先生はご自身の著書「私の教育哲学」の中で更埴教育会の「伝統の夢を持ち続け実現するために」以下のように述べられています。(一部抜粋)

物事は、出来上がった時が、崩れ始めの時である。教育会の会員は、3~4年で大部分が異動するので、よほどの努力がない限り、伝統を理解することはできないように思われる。

この事態に現状からして、最低10年に一度は、分離独立時代のような、全組織をあげて、組織体の生命の回復と創造に、取り組む必要があるようである。年々の組織ごとの改革はもちろん必要であるが、この営みは現状の、発足の根本精神の喪失とマンネリ化の流れに押しつぶされてしまう。この現状の事態に、危機感を持たない、また、自覚していないところが、更埴教育の危機であるように思えてならない。

現在の教育を阻害する諸問題を発掘し、見据え、全組織をあげて対決することによって、はじめて更埴教育会の伝統と、その歴史的命が顕現する。また、十年の先輩たちの偉業と念頭に宿って、流れる教育会の、発足の精神と伝統の中に立つことができるのである。

この最中に立ち入り、未来を展望し、更埴教育の歴史的課題を設定したいものである。この解決が、教育会の歴史的使命となる。

現在、教育界では、いじめ・不登校、学力問題、小学校英語・道徳教科化等、様々な教育課題が山積し、一方、教職員の働き方改革も叫ばれ、教育は新たな方向へ踏み出そうとしています。時代の流行に応じ、教育改革が求められていますが、こういう時だからこそ「温故知新」、不易なる教育の根源に立ち返り、教育課題を解決していかなければなりません。

更埴教育会館の玄関先には佐久間象山の書による「憑高臨遠」の石碑があります。これは、明治22年に発足した更埴教育会100周年を記念し、昭和62年の記念式典において建立されたものですが、その意味について当時の教育会長であった青木昭清先生は以下のように述べられています。

高いところを憑りどころにして遠くを照らす。或いは高いところに基づいて遠くに赴いて守るというものであります。教育は常に高さを求め、広く遍くことが大事であり、そのために子どもの如何なる処へも敢えて赴くところに使命があるものであります。「憑高臨遠」は、まさにその意味であり、そこに更埴教育会の永続性があると思うのです。(会報 第40号)

教育会の意義は、教師自らが自身の専門的力量を高め、互いに研鑽し合う自主的研修と相互扶助を柱とする会員による会員のための組織です。我々教職に就く者の帰着点それは「子どもへの愛情、教育への情熱」を否定するものはいないでしょう。

令和元年、新しい時代の幕開け。現代の教育課題解決に向け、マンネリに陥ることなく、更埴教育会の歴史・伝統・先輩の想いに立ち返り、全会員自らの手により、「憑高臨遠」高いところ(教師の本質・教育の本質・人間の本質)を憑りどころにして、遠くを照らす(すべての子どもに光を照らす)更埴教育会のあり方を再構築する年にしようではありませんか。